フィールド（現場）からの風 523

宮田守男

令和4年も平月で終わる。全国の郵便局で一斉に年賀状の受け付けが始まる時期だ。これからあっという間に師走。気ぜわしさのピークがやってくる。1カ月ほど前から、わが家にも喪中はがきが届いている。正式には「年賀欠礼状」と呼ばれている。喪中期間の正月に「新年を喜ぶあいさつを控えること」をわびる意味を持ち、相手が年賀状を用意し始める前に届けるのが礼儀で一般的なあいさつ状と同様に句読点も使わない。親の死去の連絡が少なくなり、本人や兄弟などの連絡が多く年々寂しさが積もってしまう。

今年87歳で永眠された佐藤和孝さんは、白馬村役場在籍中に配属された課の長で大変お世話になった方だった。知識人で多くの事を学んだ。読書家で専門分野の蔵書も多かった。写真家の田淵行男の著書『日本アルプスの蝶』『大雪の蝶』『山の紋章』などの購入を薦められ、わが家の書棚の蔵書になっている。今回特に書き残したい業績があり、当時を思い出しながら執筆した。

地域への貢献を語り継ぐことも大切だ

水道課に配属になった時期、源太郎の水源地に深井戸1本を掘り、配水池・管理棟・ポンプの設備を整えるなど第1次拡張工事が完成した時期だった。1日1万トンの配水量を確保、源太郎から神城地区への送水管の敷設、飯田などの配水池の新設など事業展開を行っていたが、特に八方地区の水不足は深刻だった。年末年始などの給水ピーク時には配水池の水源が底をつき、バルブ調整などで水量を制限する作業が深夜まで繰り返された苦い思い出は、忘れる事ができない。

当時は中部地区の開発が進み、観光人口が増加し、また下水道整備など生活様式の大きな変遷や人口の増加など水需要も増加の一途で、新たな水源確保を伴う第2次拡張工事は緊急課題。その担当部署の水道課長が佐藤和孝さんだった。当時の松沢宗昭係長と二人三脚で、松川水系の表流水を白馬村上水道に導入するため、建設省・北陸地方建設局高田工事事務所への申請には、多くの労苦を重ねた。

河川表流水から水利権を得るには、貯水できるダム建設など莫大な経費が求められるが、何の構造物も造らず毎秒0・2トンの許可水利権を得た素晴らしい功績だった。まさに観光の発展を支えている事を忘れてはいけない。よく「仕事に励め、責任は俺が取る」が口癖で、これが課長の信念だったような気がしてならない。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

大町市築場地籍の国道への倒木防止作業も完了。効果を期待したい